



提言 1

元北海道PTA連合会

副会長 佐藤 寿治

教育基本法改定にともない、家庭教育の重要性をかんがみ保護者が第一義的責任を有することと成りましたが、昔からまったくあたり前のことでありますし、自分の子の教育がまず先決であり、それから他人様の子の教育であるはずでず。

私は特に規範意識を教育することが重要と考えています。ゆえに、私達大人としてのモラルを守る意識が大人としての毎日の勉強と考えます。

とかく我が子は、物心のついていない幼少のままでいると思いがちで、そこに落ちている事もしばしば有り、子供の話しの内容を聞いてハツとする事があり、親はいつまでも子供以上にとばかり思ってしまう、親の自己主張が先走りして、子供の本当の気

持ちをつかむ事なく、気まずい状況になる

事が多くありますが、親の方から常に話しかけて行き、たいして反応がなくても、冗談やテレビを見ていての場面に對しての問いかけや、うるさいぐらい、しつこく行動する事や、例えば高校生になつての参観日に、来なくていいからと子供に言われたとしても、やっぱり行き参観する事でも、子供はやっぱり自分の事を気に掛けているんだなーと心の中での安心感が生まれるはずでず。

子供の方から親に向いてくる様にしむける事も親の役割と思っています。

ダメな事は絶対に許さない!! 飲酒、喫煙は二十歳からと言ったり、自らの収入を得てから! とする事。万引、薬物は何がなん

でも理由なしにダメ! と説明して言い切る事が必要です。

また、住まい方として必ず居間を通つてから子供部屋に入る、子供の行動、雰囲気をお互いに気付きやすい様にする為の動線を考えることも必要です。

私が中学生の頃、絵の担当の先生に最近おまえいい絵描かなくなったなうと言われ、ハツと俺は絵の才能があつたんだと気付かされた事が、四〇年経つても鮮明に覚えていますが、先生や親の一言が自分の人生を決める事ともなるので、自分の子の特徴・特技をよく見てやって言つてやる事が親の役割と思います。

今、放映されている「三丁目の夕日」を、親子で映画鑑賞することで家族皆で涙を流して感動を心いっぱい受けて話題を一つにすることも、絆づくりとして良い方法です。

テレビゲームが出現してこなければ本来の子供は遊びが仕事、外でおもいっきり遊んでいたはずなのになうと思つていますので、スポーツが重要だと考えます。

出来れば毎日、親は子供に会える生活リズムを作り、子供は親の顔が見られる安心感、この気持ちが続くことで、親と子の役割を果たすことができていると思っていま

す。
子供にしても反抗期もあるし、子供の世界で悩んでいるのだし、聞いて欲しい、ただ聞いてあげるだけでもいいのです。生活上の余裕がお互いに必要です。

父親の役割として、『地震、雷、火事、

親父』『子供には熱く、厳しく向き合う、威厳ある存在』。ただやみくもに怒るのではなく、正面から受け止めて話を聞き、理由をきちんと説明してあげる心掛けが必要です。子供に見られているので礼儀作法一つとっても、自分を律しなければいけないと心していく事が大切です。（この点にかけている父親が多いかもしれません）

であると考えます。

二 教育の立場からみる「現代の親の課題や問題点」と「それらの課題や問題点についての対応」

・教育基本法第一条（教育の目的）

教育は、人格の完成を目指し、…

それでは（人格の意味はさておいて）、

・親の役割（家庭教育）とは、**人格の形成**を目指し、…では？

一 はじめに
今日、子どもの親・家庭の教育力・経済力・価値観等の格差が大きい状況にあります。

問題行動・非行などを起こす生徒の家庭では、それらに何らかの問題のある家庭であることが少なくなく、発生要因の一つ

になっていと感じます。
今日の子どもの指導は、一人学校の指導



提言 2
千歳市立富丘中学校
教頭 高田 憲司

だけではなく、家庭や地域は勿論のこと関係機関との連携の中で総合的にこなさなければならぬ。現在、校内的にはさほどの問題行動がない学校でも、帰宅後、家庭で親がしっかりと我が子を教育・指導・管理出来ないところもあり、そこで問題行動の発生を防止するために親の教育力の向上が今後の課題

① 問題の本質ではなく、初期対応の在り方に問題の本質が入れ替わり、こじれた状態になるケースが多い。（危機管理の

状態になるケースが多い。危機管理の

考え方を生かした初期対応が重要)

② エンドレスな問題が多くなりつつある。
(親、学校双方に疲労感がつのる)

③ 予想もしていない理不尽な要求。(教育活動に停滞をきたす) 等々:

日々、生徒指導に関わり感じることがは:
子どもに自己肯定感を持たせることが、
子どもの健全育成にとって何よりも大切な
ことと感じています。そのためには、大人
(親・教師等)は優しさと厳しさの調和の
とれた態度・姿勢で子どもに接し、表面に
表れた部分(氷山の一角)だけで子どもを
見るのではなく、子どもの問題の本質を
観る(診る・見る・看る)ことが大切である
と考えます。「私の一番の宝物は、親・家
族です。」と思っている子どもは、逸脱し
た行為には走りにくいと感じています。

三 おわりに

教育の立場で、様々な問題に関わる度に
生徒の人格の形成・完成において、最も重
要な環境は親(家族)であると考えます。学
校は、親(家族)の在り方を変えることは出

来なくても、子どもを変えることは出来ま
す。全ての子どもにとって学校は、家庭以
上に心身共に安全な心の居場所にすれば、

その子どもの姿をみて親を変えることが出
来ると考える今日この頃です。



提言 3

いしかり福祉会 えるむ保育園

園長 坪田清美

社会生活を送っていける(生きて
いける力がある)自立した人間を
作ること

そのために不可欠なのは:

○安定した生活を(経済、親の精神、健康)

○安全な環境を(不審者、インターネット、
自然破壊、食の安全、交通事故、学校)

○安心できる人間関係を(DVや虐待、
愛され受け止められている実感、信頼)

人間関係の基礎を培う

・親との関わり(子育て)の中で:子ども
もに「あなたが大切」「あなたを愛し

ている」と伝つたわるわること。子どもの意志
を真摯に受け止め、真摯に返すキャッ
チボールで一緒に考え、進んでいく姿
勢(指示命令ではなく)

・親自身の生き方を示しながら:社会の
ルール、価値観、楽しく一生懸命人生
を全うする姿、相手を尊重すること協
力すること(家族、友達)

・子どもの周囲の人間関係を把握し、見
守りながら:子どもが、心を開き話し
てくれる関係(管理するのではなく信
頼関係で)

・親との関わり(子育て)の中で:子ども
もに「あなたが大切」「あなたを愛し

愛の実践によって、次世代にバトンを渡すこと

- 無償の大きな愛（愛の記憶）が、子どもを人生を支え続ける。
- 「この世で一番大切な存在」として育

てられることで、自尊感情が育ち、成長、自立を目指す、自信を持った人になる。

- 愛された者は、他者を信頼し愛することができるようになる。
- 生き様をもって、文化を伝承していくこと。

提言 4



北広島市図書館 館長 山内平一郎

「家庭や地域の教育力が低下しているといわれ、教育機関や教育関係者はいろいろ議論を重ねてきた。

物の豊かさを求め続けた結果のひずみと
いい、自由主義のはき違いによる個人主義
的（自己中心的な）考えの蔓延など、子ども
の問題を突き詰めていくと必ずぶつかるの
は家庭や親の有り様である。
今一度、子どもの置かれている環境に目を
向け、親や家庭の役割を考えてみたい。

一 失われつつある子どもの世界 と社会現象

十数年前、子どもの生活が注目され出したころ、習い事調査などが全国的に行われ、ピアノ、習字、そろばん、スポーツなど、一週間に七つも八つも習い事をしている子どもの姿が話題となりました。
当然、そのような生活実態から、公園などから子ども同士が群れて遊ぶ姿は消え、「一人あそび」や「友達のない子」等が

子ども達のあたりまえの姿となってきた。
いじめなどの人間関係が絡む問題も、このような子ども達の姿が浮き彫りになったころに顕著となってきたような気がします。

- 子ども同士の人間関係の希薄化
- 家庭と地域との人間関係の希薄化
- 見えなくなった父親像と子と母の一体性
- キレる子どもの増加
- 多動児、多弁児、学習障害児等々

二 ある学級経営に学ぶ

当時、私の友人に安藤英明という小学校の教師がいた。彼は新卒で道東の教師を皮切りに、上川管内の教師をして現在、旭川市内の校長をしている。彼の学級経営の基
本は、「一人ひとりの子の存在感を高め、認め合う」ということで一貫していた。子どもたちは、「掃除の一番」「お母さんのお手伝い一番」「勉強一番」「友達作り一番」「人のお世話すること一番」等々、自分の自信のあることをみんなの前で宣言し、いろいろな場面で学級を代表して活躍するのです。

何回か授業参観したが、彼の学級は、とにかく生き生き活発な学級となるのです。ある日、土別市出張の帰り、当時和寒小学校に勤務の彼の学級に飛び込み参観したときのこと。

相変わらず活気のある社会科の授業で各地の特産物の勉強中だったと思う。授業半ばで教室のドアがノックされ、黒ネコヤマトの配達のお兄さんが小包を配達にきたのです。彼は「何が届いたのかなあ」といながら小包を開けると中には『生きたうなぎ』が入っていたのです。子どもたちは、びっくりするやら触って感触を確かめるやらで大賑わい。

子どもとの信頼関係をベースに、授業に常にアクセントを考えた展開に取り組み、集中力の持続性に乏しいといわれる子ども達の集中力を高める授業を心がけていたのです。

私は、授業を見るたびに親子関係に共通するポイントが幾つかある気がしております。

学級内の個々の所属感(存在感)を認め、信頼関係に基づく人間関係の構築、集団の中の各種ルール等の学習、授業の工夫による興味付け・集中力の育成、結果として集団の中の一人ひとりの存在感を高める

三 子どもの成長と親

子どもは、成長と同時にその世界を広げて行く。と同時に、世界の広がりに伴う不安や悩みなども広がって行く。

家庭は、そんな子どもの成長を支え、リフレッシュする「安心できる港」でなければならぬといわれます。

しかしながら、核家族化をはじめ、少子化など、家庭環境の変化と共に家族のネットワークが難しい状況となり、家庭を取り巻く課題も多様化してきており、親自身が迷い、悩みながら子育てしており、「安心できる港」が危機に見舞われている家庭も

少なくない。

最近の親子関係の事件や問題行動を聞くたびに、親子関係の『他人化』が進んでいるような気がしてなりません。

地域のコミュニティの見直しをはじめとし、他との関わりを持った家庭や親のあり方を見直すことが必要と考えております。

親自身が地域の中でいろいろな価値観に触れ、子どもと接する上での幅広い選択肢を持つことが必要であり、愛情を注ぎながら地域との関わりの中で規制されることも子どもと共に学ぶことが必要と考えます。

つまり、独り立ちするための愛情と制限などを学ぶ場が家庭であり、地域でありたいものです。





提言 5

北翔大学大学院

教授 山谷 敬三郎

1 提言の概要

カナリアの原理によると、社会におけるひずみやゆがみが子どもや老人など社会的弱者に病理現象を引き起こすということになる。虐待、実子殺し、いじめなどの深刻な問題も含めて、子どもに関わる家庭・地域・学校における様々な問題が後を絶たない。これらの問題の背景を解明するには、個々の事例に基づいた論議が必要であるが、日常生活における家庭の役割・機能が十分に果たされていない、別の視点からいうと親がその役割を充分果たしていない状況もあると考える。

具体的には、朝食抜きの子ども達、遊びの変化に伴うテレビ・ゲームに頼る子育て、携帯電話などの普及に伴う子ども達への性的問題への防衛、家庭内でのコミュニケーション

シヨン不足、基本的生活習慣の欠如、不登校、怠学などの学校不適応の問題の増加など、事例を挙げると枚挙にいとまがないほどである。それぞれの家庭にだけ、それらの問題の原因を帰すことはできないが、現代社会における大人社会の規範意識の欠如、子育てに関する親の責任感・役割意識の欠如がその根底にあると考えている。

(1) 問題点

- ① 子どもの基本的生活習慣の定着に関するしつけの欠如
- ② 親自身の規範意識の欠如
- ③ モンスターペアレントやヘリコプターペアレント（2で詳細）の出現

(2) 対策

- ① 子どもを中心とした親相互の人間関係を深める活動の展開

② 親の相互扶助が可能な地域づくりや関係機関の連携

③ 子育ての不安に対する啓発活動や相談体制の確立

2 モンスターペアレントについて

モンスターペアレント (Monster parent) とは、学校に対して自己中心的で理不尽な要求を繰り返す保護者を意味する和製英語である。向山洋一の命名とされる〔教室ツーウェイ〕二〇〇七年八月号9ページ参照)。基本的には直接教員にクレームを行うものが多いが、校長や教育委員会など、より権限の強い部署にクレームを持ち込んで、間接的に現場の教員や学校に圧力をかけるという形式が増えている。また、なかには虚偽の告発をするなどして法的問題に発展させようとする場合もある。日本と同様に理不尽な要求を学校に出す保護者が社会問題化しているアメリカでは、彼らは、ヘリコプターペアレント (Helicopter parent) と呼ばれている。これは、学校の上空を周回するヘリコプターのような

に常に自分の子供を監視し、何かあればすぐに学校に乗り込んでくることからきている。

小野田正利（大阪大学大学院教授）によると、こうした保護者が目立って増え始めたのは一九九〇年代後半からであると考えられる（アメリカでは一九九一年である）。この時期に子供が学齢期を迎えた人々の多くは一九七〇年代後半から一九八〇年代前半の校内暴力時代を経験しているので元来教師への敬意を持っておらず、さらに教職の人氣が低かったバブル期に社会に出たために教職を尊敬していない、というのが小野田氏の解釈である。また「言ったもん勝ち」がまかり通る風潮が強まっていることもモンスターペアレント出現の原因の一つではないかと小野田は指摘している。

また、喜入克はこうした保護者の増加の原因を「保護者の消費者意識の暴走」と見ている。喜入によれば、保護者は自分の子供が学校で他の子供より「損」な待遇を受けることが我慢できないのであり、それは「同じ値段を払えば同じ商品が手に入る」

という意識で教育サービスを捉えているからであると考えられる。例えばある学年の学級担任が新卒、中堅、評判の良いベテランというような構成になったとする。モンスターペアレントは、自分の子供が「評判の良いベテラン教師」以外に担任されることを不当待遇であると考ええる。また、喜入は、これらモンスターペアレントやその子供に学校が手こずる理由として、彼らが「学校と対等な消費者」としての立場と「まだ半人前である子供」としての立場を使い分けるといふ現象を指摘している。すなわちモンスターペアレントやその子供たちは、学校に対してクレームをつける際には「消費者」として振るまい、そうしたクレームが学校に「ルール違反」と認定され、退学や停学などの処分を出されそうになると「半人前である子供への情狀的酌量」を要求するのである。

こうした保護者については、門脇によっても世代の問題が指摘されているが、山下・岡田らは小学校2年生の保護者を対象としたアンケート調査のクラスター分析をも

とにターゲット・プロファイリングを行うことで、「既に子育てを経験している、経済的なゆとりは無いが教育ママ度はそれなりに高い、パート勤務の母親など」（山下・岡田らは「生活切迫型パートママ」と命名）が、学校への信頼度の低さを示すことを明らかにしている。

このような保護者側の変質のほか、福田ますみはモンスターペアレントが教師による生徒いじめを捏造した福岡県での事例を取材した著書『でっちあげ：福岡「殺人教師」事件の真相』において、「ダメ教師」の構図に安易に飛びき、きちんとした取材をせずに報道してしまうマスメディアの問題（この事例では朝日新聞と週刊文春）も指摘している。その他、地域の間関係が希薄になった結果、かつては地域社会が緩衝材となっていた個々の親の不満が直接学校に持ち込まれるようになった状況も背景にあるという意見も多い。

なお、こうした保護者は初等教育や中等教育に限られた問題ではなく、星野・横山・横山・水野・徳田らは幼稚園の保護者に

おいても、自己中心的な保護者（特定の園児は自分の子供と遊ばせるな、クラス分けで特定の園児と同じクラスにするよう要求、テレビや本で紹介された教育方法を導入するよう要求する、時間かまわず保育者の自宅に毎日電話をかける等）が問題化していることをアンケート調査によって示している。この調査によると、保育者の4人に1人が問題のある保護者であるとしている。

(1) 問題点

こうした保護者が一人でも出現すると、教職員はその対応に膨大な時間を奪われてしまう。その結果、他の児童・生徒のために使う（教材研究、授業準備、生徒指導、部活指導、補習などの）時間がなくなり、場合によっては学校全体に悪影響が広まる。二〇〇六年に金子元久が一万校の小中学校の校長を対象に行ったアンケート調査によると、中学校では29・8%の校長が「保護者の利己的な要求」が深刻な教育の障害になっていると答えており、「やや深刻」と答えた48・9%と合わせると78・7%の校長が保護者の利己的な行動を問題

視しているという結果が出た。なお小学校では「深刻」が25・7%、「やや深刻」が52・1%で合計は77・8%となっている。

適切な対応がなされればその影響は最小にとどまるが、対応が一人の担任教職員に押しつけられた場合などでは逆に被害が拡大したり、担当教職員自身が体や精神を病んでしまう事例も珍しくない。特に、経験が浅い新任教師は適切な対応ができず問題を抱え込んでしまうと言われている（喜入、二〇〇七）。また、福田の報告した福岡の事例に見られるように、学校の管理職が毅然とした対応を行わず自身の責任回避に終始することで事態が悪化するケースもある。この事例ではモンスターペアレントの攻撃が始まった直後、校長が一旦モンスターペアレントに安易に迎合して教師側の落ち度の存在を認めてしまった結果、裁判が始まった後に引込みがなくなつて教師側の責任を認める証言を行い、さらに教師を追いつめるという状況が発生した（福田、二〇〇六）。

(2) モンスターペアレントの行動例

- ① 自分の子供が注意されたことに逆上して職員室に乗り込み延々とクレームをつける（「クローズアップ現代」に登場）
- ② 早朝であろうが深夜であろうが教職員の自宅に電話をかけ、何時間もクレームをつける（「クローズアップ現代」に登場）
- ③ 子供同士の喧嘩に介入し、相手の子供を非難する長大な文書を学校に持ち込んで処罰を要求する
- ④ 自分の子供がリレー競技の選手に選ばれないのは不自然だとクレームをつける
- ⑤ 子供がプリントを親に渡さなかったことを、教師の指導のせいにする
- ⑥ 「自分の子どもを手厚く指導するために専用の教員をつけろ」「我が子を学校代表にして地域行事に参加させろ」などと要求する
- ⑦ 「〇〇小学校〇年〇組の〇〇」という児童はクラスの迷惑なので学校に来させないでくれ」といきなり都道府県の教

育委員会に匿名で要求する

⑧ 授業参観で他人の子供にクレームにつ
け、親同士で喧嘩する

⑨ 「遅刻がちの子どもを担任が迎えに来
ない」などという理不尽なことを教師
のせいにして学校にクレームをつける。

(3) 対策

「モンスターペアレント」という語が登場する以前からこうした問題を「親のイ
チャモン」として研究してきた小野田は、
モンスターペアレントのイチャモンを額面
通りに受け取るのではなく、その要求に
よってモンスターペアレントが実際には何
を求めているのかを察知し、可能な解決策
を探るという手法を提言している。喜入は
こうしたモンスターペアレントの対応は
個々の教職員や学校では不可能であるとし、
教育委員会内にモンスターペアレント対応
専門のチームを設置することを提案してい
る。

教育再生会議は、二〇〇七年六月一日に
決定した第2次報告の中で「学校問題解決
支援チーム(仮称)の設置」を提言している。

また学校協議会等地域社会と学校との連携
を図る試みも行われている。文部科学省は
二〇〇七年七月、全国の教育委員会から具
体的なモンスターペアレント対策施策案を
募り、それらの中から一〇の自治体を選ん
で二〇〇八年度に実施させて、その費用の
8割を国の予算から補助するという計画を
発表した。

◎参考文献

- 小野田正利『悲鳴をあげる学校―親の
イチャモン―から「結びあい」へ』
(旬報社、二〇〇六)・小野田正利「学校
への「無理難題要求」の急増と疲弊する
学校現場―「保護者対応の現状」に関す
るアンケート調査をもとに」『季刊教育
法』一四七、一六二二(二〇〇五)
- 小野田正利「学校とイチャモン(無理難
題要求)―教職員の「考え方」と保護者
の「思い」」『教育』五六、一〇(二〇〇
六)
- 門脇厚司「クレーム社会を加速する若い
親たちの特性」『児童心理』六一、八

(二〇〇七)

- 喜入克『高校の現実 生徒指導の現場か
ら』(草思社、二〇〇七)

- 福田ますみ『でっちあげ 福岡「殺人教
師」事件の真相』(新潮社、二〇〇七)

- 星野ハナ、横山範子、横山さやか、水野
智美、徳田克己「幼稚園教諭の感じる
「困る保護者」とその対応」『日本保育
学会大会発表論文抄録』No.53

- 山下絢・岡田聡志「学校教育に対する保
護者意識の実態―ターゲット・プロファ
イリングによる『学校教育に対する保護
者の意識調査』の二次分析―」第七回S
PSS研究奨励 賞懸賞論文(優秀賞)

